



# 日本の詩歌

15 室生犀星

中公文庫

中公文庫

# 日本の詩歌

15

室生犀星



中央公論社

中公文庫 ©1975

日本の詩歌 15

室生犀星

昭和五十年一月二十五日印刷  
昭和五十年二月十日発行

発行者 高梨 茂

用紙 三菱製紙  
整版印刷 三晃印刷  
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104

東京都中央区京橋二丁目一番地  
振替東京三四番

定価はカバーに表示してあります

目次

抒情小曲集

7

青き魚を釣る人

91

鳥雀集

115

愛の詩集

131

第二愛の詩集

155

寂しき都会

187

星より来れる者

211

田舎の花

230

忘春詩集

246

|             |     |
|-------------|-----|
| 高麗の花        | 265 |
| 故郷図絵集       | 281 |
| 鶴           | 287 |
| 鉛筆詩集        | 313 |
| 鉄 集         | 318 |
| 哈爾浜詩集       | 324 |
| いにしへ        | 341 |
| 日本美論        | 347 |
| 木洩日         | 353 |
| 旅びと         | 366 |
| 昨日いらつしつて下さい | 383 |

詩人の肖像

鑑賞

年譜

カット

中村真一郎

伊藤信吉

恩地孝四郎

岸田劉生



室生犀星





# 抒情小曲集

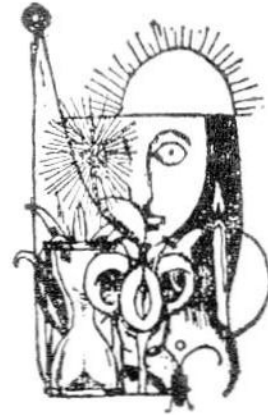
## 序 曲

芽がつつ立つ

ナイフのやうな芽が

たつた一本

すつきりと蒼空あをぞらにつつ立つ



『抒情小曲集』は大正七年九月刊行された。収録作品九十一篇。他に序詩二篇が序文その他の文章の間に挟んである（上段の二篇）。

巻頭に北原白秋、萩原朔太郎、田辺孝次の序文があり、小松玉巖作曲の「砂丘の上」、弘田龍太郎作曲の「霜」二篇の楽譜が写真版で入っている。

このほか「自序」「抒情詩信条」、編集手記、「『抒情小曲集』覚書」などの文章がある。また「いとけなかりし日のおもひでに」「われら少年の日の友とみないまは寂しくかたるべし」などの断章や、ルイ・ベルトランの詩句が挿入してある。挿絵は恩地孝四郎。小型本である。

本巻には作品全部を収録した。

雪のしたより燃ゆるもの  
かぜに乗り来て  
いつしらずひかりゆく  
春秋ふかめ燃ゆるもの

## 自序

私は本集に輯<sup>あつ</sup>めた詩を自分ながら初<sup>はつ</sup>初<sup>はつ</sup>しい作品であること、少年の日の交り気ないあどけない真心<sup>まごころ</sup>をもつて書かれたことを合せて、いくたびか感心をして朗読したりした。ほんとに此<sup>この</sup>詩集にある小品な詩は、恰<sup>あた</sup>も『小学読本』を朗読するやうに、率直な心で読み味つてもらへれば、たいへん心うれしく感じる。このやうな幼ない「抒情詩時代」が再び私にやつて来るものもなく、また、それを再び求めることも出来ないことを知つてゐる。人間にはきつと此「美しい抒情詩」を愛する時代があるやうに、だれしも通る道であるやうに、ほんとにこれらの詩をあつめて置きたいと思つたのも、みなここにゐるのだ。

この本をとくに年すくない人人にも読んでもらひたい。私と同じい少年時代の悩ましい人懐こい苛<sup>いら</sup>苛<sup>いら</sup>しい情念や、美しい希望や、つまなき悪事や、限りない嘆賞や哀憐やの諸<sup>もろ</sup>諸<sup>もろ</sup>について、よく考へたり解つてもらひたいやうな気がする。少年時代の心は少年時代のもでなければわからない。おなじい内容は私のこれらの詩と相合してそして、初めて理解され得るやうに思ふ。

犀星はこの詩集の作品の思い出を、『抒情小曲集』覚書で次のように述べている。

\*

年譜 二十歳ころより二十四歳位までの作にして、なかんずく「小景異情」最も古く、「合掌」最も新しきものなり。時折の心持ちによりて五年間の春秋の季節の詩は入り乱れたるも、出来得る限り年譜は正しく編しぬ。

\*

創作地 郷里金沢市千日町雨宝院といえる金比羅神社、寂しき榎<sup>えん</sup>の大樹に寺領の四方はとりかこまれ、昼なお暗き前庭のはとりきわめて幽遠なり。その奥の間よりは直ちに犀川<sup>さいがわ</sup>をのぞむ。美しき清流寺院の岸を灑<sup>あ</sup>いて夏といえども涼しきことかぎりなし。川を隔てて医王、戸室<sup>とむろ</sup>の山さては遠く飛驒<sup>ひで</sup>の連峯をも望むことを得。

\*

へながみなどで感じる悩ましさを望を追ふ心は、きつと此中でぶつかり合ふやうに思ふ。

誰でも云ふ「少年時代は楽しかった」と、「少年は神より人間より最つとかな神聖な生物だ。」とドストエフスキも云つてゐる。若しい木のやうに伸びゆく力は、ほんとにあの時代に限つて横溢してゐる。頭のよい「頭のいちばん幸福な」時代だ。いちど見たり感じたりしたら、それにすぐ根が生え、植ゑ込まれる時代だ。

私はいまでも感じる。

少年時代を感じた季節の、変移の鋭い記憶とその感覚の敏活とは、ほんとに何にたとへて言つていいか解らない。まるで「触り角」のある虫のやうに、いつもひりひりとさとり、深い魂を有つてゐるものだ。それはまだ小児の時代の純潔や叡智がそのまま温和にふとり育つて、それが正確に保存されてゐるからである。「小児に就て人に接することを学べ小児は未だ汚されず、小児にとつては人みな同じ」とトルストイも言つてゐる。

私は雪の深い北国に育つた。十一月初旬のしぐれは日を追うて雲となつててして美しい雪となり山や野や街や家を包んだ。町の人人は家家の北に面した窓や戸口を藁や蓆をもつて覆うた。

野及び散歩の地として、最も好みしは犀川べりなる蛤坂新道、下つては犀川鉄橋のほとり等。これらの地は絶えず子の若きそのころの胸裡を去来して、シーズンに移り変り目ごとには高き鼓動を覚えたるものなり。「秋思」は有名な兼六公園にての作にして、園の入口なる青く柔かき芝生の生えし様、その色いまでも忘れがたきものの一つなり。

\*

旅行 京都、上州前橋市近郊に旅せし時の作、及び「足羽川」の一篇等なり。足羽川は越前福井市を流るる川なり。京都よりの帰るさにここ福井の街に約一ヵ月ばかり滞在せしことのあり、その時になれる詩にして、美しき足羽の川の土手の上の、若き桜樹はいまもなお春くるごとに花咲けりとさく。なつかしきことのきわみ。旅行はすべて予が幼き日のわがままなる

道のふた側に積まれた雪は、屋根とおなじい高さにまでなつて、夜は窓や戸口の雪の、中から燈<sup>あかり</sup>が漏れてゐた。戸外運動といふものが雪の爲めに自然なくされてゐた子供の私らは、いつも室に坐つたり暖炉にあたつたりして、恐ろしい吹雪の夜を送つてゐた。そのころ私は俳句をかい<sup>か</sup>いたりコマ絵をかい<sup>か</sup>たりして、自然にたいする心をだんだんに開いてゆくやうになつてゐた。極度に人懐こい、もの恋しげな心を不断に有<sup>も</sup>つてゐた私は、また一面に於ては烈しい一人ぼちが好きであつた。本をよんだり物を考へたりしたあと、よく自分で自分が作つた甘美な哀愁にひたりながら、雪あかりのする窓際で「子供らしくない」事を考へてゐた。それが私たち少年のいつも隠れてする心の隠れ家みたいに楽しく又悲しいものであつた。

四月まで続く降雪を我慢しきれないやうに、雪の下では春の浮動するものが生き初めるころは、わけても悩ましい力がからだに湧いてくるのであつた。私たち少年らは、おたがひに女の子のやうな深い情愛をかんじ合つて、かく詩や俳句の対象はいつもそれらの友に於て選んだ。美しい少年の友だちらは、ある時は、詩のことを話したりして、熱い握手や接吻<sup>あを</sup>をしたり、蒼い日暮の廻くことをしらない散歩をしたりしてゐた。

私どもは、そこここの散歩や、草場のあたりでいろいろな詩をうたつた。

ことより、慈愛あつき父母にそむきてのことなりき。今ははや父もみまかりて世に空し。

上州前橋には三度ゆけり。ここに子<sup>こ</sup>が畏友萩原を知る。小出<sup>こいで</sup>磧<sup>がき</sup>といえる利根の河畔、小さき砂山、櫟<sup>くもぎ</sup>の若き林、牧牛、赤城山、公園等、皆子が心に今もなお生けり。旅はおもしろけれどもはかなく哀<sup>かな</sup>し。利根の砂山、氷の扉、さくらと雲雀<sup>ひばり</sup>、土筆<sup>つづし</sup>、前橋公園の五篇を得たり。

\*

海浜 海の詩はすべて金沢市より二里を隔つる金石<sup>かねいし</sup>といえる所に作る。ここは二千戸を数え人心すべて質純なり。町より五丁程を隔てられて釈迦堂といえる僧院あり。静かなる院にして有名なる銭屋五兵衛の墓碑あり。ここのとある一室に一年有余転地療養せしことあり。院は砂丘の蔭、涼しき松林のはずれにありて、お花畑より

風のやうにうたひながら自分でつい感心してしまつて、ほろりとするといふやうなこともあつた。見るものが悲しくひしひしと迫つてくるのであつた。あの何物にもたとへることの出来ない、弱弱い美しいセンチメンタルな瞬間に、私も、自分が其処<sup>そこ</sup>に生きることを幸福に考へ、また必然さうあるへきことが自分らの若い使命のやうに、この全世界でいちばん偉い詩人でもあるやうに考へてゐた。謙譲<sup>けんじやう</sup>やはにかみもなかつた。傲慢<sup>かうまん</sup>と自愛<sup>じあい</sup>とにたえず圧倒されてゐて、それを当り前のやうに思つてゐた。それほど、世間の本をよまない仲間にたいしては遠慮がなかつた。

私は抒情詩を愛する。わけでも自分の踏み来つた郷土や、愛や感傷やを愛する。「くちばし青き小鳥」の囀<sup>さへつ</sup>りは可愛い。それを讃<sup>たた</sup>へたい。人間にたつに一度より外ない時代を紀念したい。それをそのまま次ぎに味ひつつある若い人人らの胸にたたみ込んで置きたいと思つてゐる。

もとより詩のよいわるいはすききらひより外の感情で評価できないものだ。これらの詩がどれほどハートの奥の奥に深徹してゐるかについて、今私は何もいへないけれど、人人はきつとよき微笑と親密とを心に用意して読んでくれるだらうと思ふ。むづかしい批評や議論ぬきの「優しい心」で味つてくれるだらうと思ふ。それでこそ私がこの本を世に送り出した甲斐<sup>かひ</sup>のあることを

いでて町に通ず。予ここにてはじめて『屋上庭園』を友白秋より送らる。このころより予が詩の心よりやく動きかつ固められたり、かえりみればもはや十一年を閲<sup>くわい</sup>しぬ。世にも静かにして、優しく、美しき尼僧らによりて、病氣の予は毎日新しき野菜と、親切にして充分なる静養を与えられたり。友萩原もまた、遠く前橋市より来りてこの寂しき僧院を訪ずれぬ。時は大正四年五月のことなりし。ここにてはかもめ、海浜独唱、砂山の雨、魚とその哀歎、松林の中に坐す、砂丘の上、静かなる空、水すまし等を得たり。

\*

降雪 十月下旬より時雨<sup>しぐれ</sup>となり、十一月終りは冷たき霰<sup>みぞれ</sup>となる。霰となりて永き冬に入ればやがて霰<sup>あられ</sup>となり、雪となる。二、三尺も積るは例年のことにして、時に丈余にもなることありて、犬等は皆屋

感じるのだ。

一月に『愛の詩集』を出してからもう一年に近くなる。『愛の詩集』まで歩んだ自分を知るにはどうしても此の「抒情詩時代」の自分をも知つてほしくおもふ。自分にもなほ美しい恋を恋したり、甘美な女性的なリズムを愛したりした時代のあつたことを物語りたいのである。ほんとはこの『抒情小曲集』は『愛の詩集』と併せて読んで、僕の心持のたてとよこに縋れ込んだリヘムをほぐして見てほしいのだ。よく読んでくれる人人は、この小曲集の終りのペエジに近づいてゆくごとに、だんだんに人間の感情がひびれたり、優しく荒れて行つたりしてゐることを考へてくれるだらう。風にいためられた生活の花と実とを今まとめて見ることを嬉しく悲しく思ふ。

千九百十八年七月十三日

郊外田端にて

室 生 犀 星

根の上にて遊び戯る。雪降ればかえって温かく、人人は夜炬燵を囲みて団欒す。雪降れど霰凍れども故郷の冬は忘れがたかり。

\*

暗黒時代 小曲集第三部は主として東京において作らる。本郷の谷間なる根津の湿润したる旅籠にて「蟬頃」の啼く蟬のしいといえるを聞きて、いくそたび蹉跌と悪酒と放蕩との夏を迎えしことぞ。銀製の乞食、坂、それらは皆予の前面を圧する暗黒時代の作なり。幾月も昼間外出せずして終夜なる巷にゆき、悪酒にひたりぬ。その悔新しくしてなお深くふけりてゆきぬ。今もなお思い見て予の額を汗するものはこれなり。ある時は白山神社の松にかなかなの啼くをきき、上野に夜明けの鐘をききては帰りぬ。合掌のあとさきはじつに病氣ともたたかいし時代なりしなり。

## 小景異情

### その一

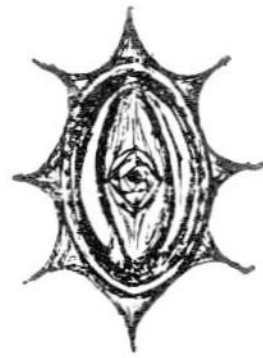
白魚はさびしや

そのくろき瞳はなんといふ  
なんといふしをらしさぞよ  
そとにひる餉<sup>け</sup>をしたたむる

わがよそよそしさと

かなしさと

ききともなやな雀<sup>すずめ</sup>し<sup>な</sup>ば啼<sup>な</sup>けり



「小景異情」は大正二年五月、雑誌『朱鸞<sup>シュラン</sup>』（北原白秋主宰）に発表された。情感のこまやかさにおいて、言葉のリズムの微妙さにおいて、その哀歎の切実さにおいて、当時の詩壇に比を見ない作品だった。

「その一」「そとにひる餉をしたたむる」というのだから、街の食堂あたりで昼の食事を摂ったわけだが、それは遅い午前のことだったかもしれない。「わがよそよそしさ」はその食堂にも食事にも心が添わないという意であり、外食の味気なさという意である。

日は明るく、軒に雀が騒いでいる。それなのに気持は沈んでいる。食事に供された白魚の黒い瞳の色さえ、おのずから悲しみに誘うようだ。貧しい日々を過ごすことの悲しみと、季節がもたらす春愁とを重ねた哀切な抒情である。



## その二

ふるさとは遠きにありて思ふもの  
そして悲しくうたふもの  
よしや

うらぶれて異土の乞食かたゐとなるとても

帰るところにあるまじや

ひとり都のゆふぐれに

ふるさとおもひ涙ぐむ

そのころもて

遠きみやこにかへらばや

遠きみやこにかへらばや

## その三

「その二」 犀星の全作品を通じて、最も広く知られている抒情詩である。たとえ異土（故郷でない土地）で乞食になろうとも、故郷は帰るべき所でない、という訣別けつべつの言葉で逆に郷里への愛を歌ったのだが、それが逆の表現である故に、郷里を思う心がいつそう切実に響く。

この詩を作った時、犀星は都落ちして金沢にいた。その懐かしい土地を去って、再び上京しようとする際に、「ひとり都のゆふぐれに／ふるさとおもひ涙ぐむ」自分の姿を思い描いたのである。都会の一隅に生きて孤独に耐えること。そういう決意を秘めて、間近く上京する日を思ったのである。

「その三」 幼い昔にかえたかのように素直な心の歌である。失